

北越雪譜
 初編
 下三卷

ル 4
 3131
 3



門 凡
號 3131
卷 3

鳥田藏書

北越雪譜初編卷之下

目錄

澁海川さかべつより 順上下
鮭の食用
鮭を捕る打切並
漁夫の溺死
鮭漁の類術
人家の垂氷
滝の氷柱
寒行の威徳
關山村の毛塚
泊り山の大猫

鮭の字考
鮭を出る所並 鮭始終
撥網
千曲川の総滝
鮭の洲走り
笈掛岩の氷柱
雪中の寒行
雪中の幽霊
雪中鹿を追ふ
山言語

北越雪譜初編卷之下

目

北越雪譜初編卷之下

童の雪遊こどものゆきあそびひ

通計二十三條

雪小座頭ゆきせうざとうを降くだせ

越後奇跡録

五卷 鈴木牧之編撰
近刻 京山人百樹刑定

此書を越後七不思議の細説并小圖名所旧跡の奇跡并國中温泉の圖并主治山川勝景の圖説近古人物名譽傳傳持の餘種々の奇談其地を踏尋其事蹟見ること小記たる假字文の書を全
干此氏中葉の餘地在り空しく其書を以て右の書名を標して大方の諸君不報に刻し先生等の好評を祈る

京水百鶴画圖
書肆 文漢堂謹識



北越雪譜初編卷之下

越後塩澤

鈴木牧之 編撰

江戸

京山人百樹 刑定

○淡海川さかべつとう

我國の但言小蝶をべつとうといふ淡海川のやとりゆてはさぶつとうといふ蝶ハ諸の虫の羽化する所之大なるを蝶といひ小なるを蠶といふ本州其種類多草花も蝶小化する事本草ゆもをえり蝶の和訓をかをひらことといひ新撰字鏡ゆもええい言とさかべつとうといふ名美ハ未考をさて前ふりて淡海川ゆて春の彼岸の頃幾百万の白蝶水面より二三尺ををるごとく羽もたきそのふたり群るが高さハ一丈あり兩岸を限りとて川下より川上の方へ飛行その形状花のふきとらんハかろろに幾里ともる流きふ霞をひきさるごとく朝より夕まで悉く川上へつゝさぶつたそのうきりをあむむ川水もええざるやとてさて日も暮るんとする小

いさばく水面をかちりて流るるそのさぬ白布をうらひごとく其蝶の形
燈籠やどちて白蝶之我國の大小の川に幾流もあるや此流海川のさなりて
毎年さなりて此事あるも奇とせざらむ天明の洪水以来此事絶てず

○本草を按る石蟹一名を沙蟹といふの山川の石上附く藻をさる春夏羽
化して小蟹となり水上飛ぶなり件のさるべしうい流海川の石蟹るべし其
種を洪水流るる冬にさるる多しえさるるべし他国中も石蟹を生ずる川あり此蝶
あらんもあるべし余此蝶をうらひて多し近隣の老婦若きころ流海川の辺りより
嫁せし人ありて多し尋ね問ひしその老婦の語りてまをさるる記せり

○鮭の字の考

新撰字鏡とのみ字書八本朝の僧昌住といひ人今より九百四十年あまり
のむり寛平昌泰の年間作りし文字の吟味を著す書にむじより世の
学匠より傳へて重宝せしきまをるるを近き頃村田春海大人右の書を

京都ゆき購得てのち享和三年の春創り板本とせし世の重宝とせりて
より右の学者の机上に置けり實に春海大人の賜なりけり右の字鏡ありて
右二十余年を歴て源の順朝臣の作りし和名類聚抄ありき是も字書之
元和の年間那波道四先生創りて板本とせしなり後板をりて和名抄ありて
右五百年ちりてをへて文安年中下学集とのみ字書ありきこと元和二年
創りて板本とせりなり下学集より五十三年の后明應五年林宗二
集を作りて文龜のころの活字本ありては引節用集の推輿之其右
百八十年を歴て元禄十一年小模寫昭武駒谷山人が作りし江
一名合類節用集とのみ板本あり宗二が節用集を大成する物也い
平他字類抄のさる下引本朝の字書のさる大低八件のごとくさるる
節用集ハ新撰字鏡和名抄を先祖の父母とて右の八皆其子孫之是ハ鮭の字
の事を言んとす童蒙の為先りてけり ○新撰字鏡鮭の部小鮭

節の用ひざる家も一又病人も喰も他国也腫物小いもいふ事あること
るゆゑあやあらん

○鮭を出る所

鮭ハ今五畿内西国中出を所を聞て東北の大河の海も通る大鮭あり
松前蝦夷地最多一塩引とて諸国(通商ハ此地も限る次大我ハ越後
不多一又信濃越中出羽陸奥之常陸もありときつてその国の鮭ハ
その所の食ふあつて不足の通商するふと江戶ハ利根川ありと
りども稀あるゆゑ初鮭ハ初鯉の價小比とて我國中ハ毎年七月二十七日
所とあつて諏訪の祭りの次の日より鮭の漁をとり十二月寒のあけるを漁
の終りと先古志の長岡奥沼の川口ありゆゑ漁一一番の初鮭を漁
師長岡へてまらば例とて鮭一頭小一頭を二尺七俵の價を賜ふ(俵五をん
とてまらば例とて)鮭の大者ハ三尺四五寸小なるも二尺四五寸と
定めあり俵の重下る

男魚女魚の名ありめるハ子あるゆゑをとりハ價貴一五番まで奉りて
后を賣る初鮭の貴きゆゑあつてまらば一ことを賞する江戶の初鯉魚
小をとりかゝる初鮭ハ光り銀のごとく小一と微青あり肉の色紅をぬ
りたるが如し仲冬の頃小いまらば身小班の錯して肉も紅の薄し味もや劣
まり此国あり川口長岡のありを流る川にて捕りたるを上品とて味ハ他
小比とて十倍に僅小其地を去まば味ハ美らるゆゑその味ハ美らるものハ北海
より長江を流りて困苦するの度小あつてくるゆゑあらん臭急浪小困苦味
ひるるゆゑ甘美のゆゑ北海の臭の味ハ厚と南海の臭の味ハ淡の差ハあつ
たごご

○鮭の始終

我國の鮭ハ初秋より北海を出る千曲川と阿加川の両大河も流ること
其子を産んとて女魚小男魚隨ての流る事ありて五十余里河小在



山崎の山

五

山崎の山



海川奇蝶之圖

海川奇蝶之圖

海川奇蝶之圖

事をも五ヶ月ありてその間小八十九人小捕らんとせざる海へ飯る故小大
 小あり子を産つける所ハかまふ心小ありて一定あらざるとども千曲と奥野の両
 河の合する川口とふりり沙小小石のまじりゆきこきよりをのまが産所と流
 きの絶急くぬ清き流水の取小産こらまんとて鮎の捨る群るを漁師のふ
 とび小堀小つくとさふつくとものいふ沙をわらふまがのくちををる女魚男魚とも小
 尾をもて水中の沙を掘るその廣さ一尺あまり深さ七八寸長さ一丈あまり数日
 小してこきを作るつくりをいふ女魚そのるゑ鮎を一粒づつ産むらむをそそ
 男魚己が白鮎を弾着直小女魚男魚堀のけり沙石を左右より尾鮎小く
 まひうけて鮎を埋む一粒も流さず事をせむさて此一堀小産をいふ又ととふ
 並り掘りて産らるとり幾條もあつりて終る八九尺四方の沙中一行
 よく腹の子をのこる産をる或ハ所を替ても産とぞ沙小小礫の交りたる
 所小ありざる産とと漁師がりりその所為人の智小をさくかこるを

産終るまでの困苦のよあ小尾鮎を獲ハ身瘦勞とるまふあひくくでり
 深淵ある所小いさばら小沈居て勞を養ひりあごとく肥太りて再び流
 小流る掘小つとき時ハ漁師もこきをこらばあく捕らりのあまとも強て
 せぬると女魚さへともさむ男魚ハ其所をさむと鮎の河小流る子を産んと
 てその女魚小男魚随てのびる子の為小女魚を助るらんことも又人の
 心小ことさるげさき奇あるるハ河の廣き場小く鮎を産まざる所洪水を
 みて瀬うりて河原とるりか幾とをさても産ら子腐むや穴瀬とるさ
 その子生化て鮎とる一年我が住む所の在るゑ奥野川のとより小住む人
 井を掘り小鮎の腥るをやりいせり多ありりと友人がかり鮎の生化する
 を漁師のこら小をけりともさうけりともいふ早化身化鮎水小ある事十四
 五日小して魚とる形ち糸の如くさけ二寸腹裂て腸をさむと多小佐奴の名
 ありといひ傳ふ春小いさば長とて三すあまり小るこきをさるるを捕らぬ事

と此子鮭雪消の水不随ひく海不入る海不入るのち裂る腹合して腸を
 とと漁父のりり前小もりり如く鮭の漁ハ寒中を限りとを寒あけて捕ま
 崇をるをとりひつる我ガ若りり時氷村の一農夫寒あけて后頼のとりり
 鮭を奪ひてを喰ひく熱小を三日小して死する事ありささたりありと
 ひの口碑の説も誣べりり又く産もささたりりその家断絶とい
 ひはく鮭の大きハ三尺四五寸小ありり之ハ年々綱を脱ぎて長ド
 ろん我ガ若年のころハ鮭もささたりり其の價もりり近年ハ
 捕り事少きも價もかのぐりり倍せり年々工を新小して漁も多
 捕減りりるん女奥の大きハ一升もあり小ハ三四合小をささ江戸
 多くりりあつる塩引と唱をりり鮭と越後の鮭ハ一品別種も物あり
 或物産家のりり河不生さく海不成長もささりり海中小細不入
 する事なり其始終をわく小鮭ハ鱗族の奇奥といふ也

牧之常ふもささ寒気の頃捕りる鮭と男奥の白鮭とをま
 ト鮭居る川の沙石小包を瓶やうのりり入る鮭をさ
 国の海不通る山川の清流水の瓶小つりり入るを沙石
 のまささけのりりつりり如く小瓶にた此川ありり鮭をくとも
 三年捕る事を国禁ありり鮭を生せんもささりり生せば国益
 ともありり江戸の白奥ハむりりそのりりをささりりささりり

打切り並ふ

北海新泻の海門ありり大河ハ阿加川と千曲川と千曲川のりり
 千曲川一名を信濃川と
 千曲川の水源ハ信濃越後飛驒の大小の川ありり流を併て此大
 河をささ越後ハ妻有上田の二庄をささりり奥野川の急流をりり
 奥沼郡
 葦上の庄川口驛の端ありり信濃を流る川と合して古志郡蒲原郡の

中央をながると海入る信濃の流ハ濁リ越後ハ清一信水ハ犀川の濁水
 ありあゑ之鮭初秋より海を出て此流ハ休る蒲原郡の流ハ底深く河廣由
 大網を用ひて鮭を捕るか川口驛より上上田妻有のありて大打切といふ
 事をなすて鮭を捕るその仕方ハ夏の末より事をなすて岸根より川中
 丸木の杭を建つて横木をそえこま透間あり竹箐をこまて牆のおとふ
 一川の石をよせつけてかたを長さ六百間二面間小川の周圍形ハ川の便利
 小舟ハ船の通路ハこまを除き障りをなさざり又通船の路印を建つて夜の
 為とをさしてこまつとハ物を箐下ハある鮭の入るべきやうにかくと物
 のせまをも此つでの作りやうハ竹を箐ふあて末を縛り鮭の入るべき口の方ハ
 竹の尖を作りつけて腰をうへ地ふつ方ハひも上ハ丸々胴ハ彭張あり
 長さハ五尺なりと鮭入らんとをさバ口廣グやうにゆも功小作りたるもの
 こまをつとハハ筒といふべきを濁リ訛るらん田舎言語ハ古言のまを

いひつゝまむりをまのふもあまと言の清濁をとりちと物の名をどのか
 なるも多一阿加川を野まへさて此打切を作り幾なるの費ある事由漁師
 ども語らひあひさるるや打切ある岸ハ假小小屋をつつて漁師ども
 昼夜さふありて夜も寐せし鮭あかを待て七月より此業をなすなり
 て十二月寒明まう一連のりのかりく此小屋ありて鮭をさす此打切ハ川口を
 一番とて氷上ハ十五番ありらハいづくの持とて川ハその境目ありて
 なるをさす巖重之○さて鮭ハ川下より流小舟を打切ハ舟のりよりハ
 野ハ流を打切小せりて小滝をさす多滝小のりをいさうや大ハ打切の
 よとふりやうかの垣小せりて蓄るべき所やあるところかこまをさす
 なる所ハいさうなりとせらふ入ま底あるゆゑとせらふ口ハ大
 りの腮ありて出さるるあり○さて小屋ハありのかりつとこまをさ
 をさくりたるをさすといふ舟をのりて大木をニッふりてこまを○艘の浅き
 舟を用ひて

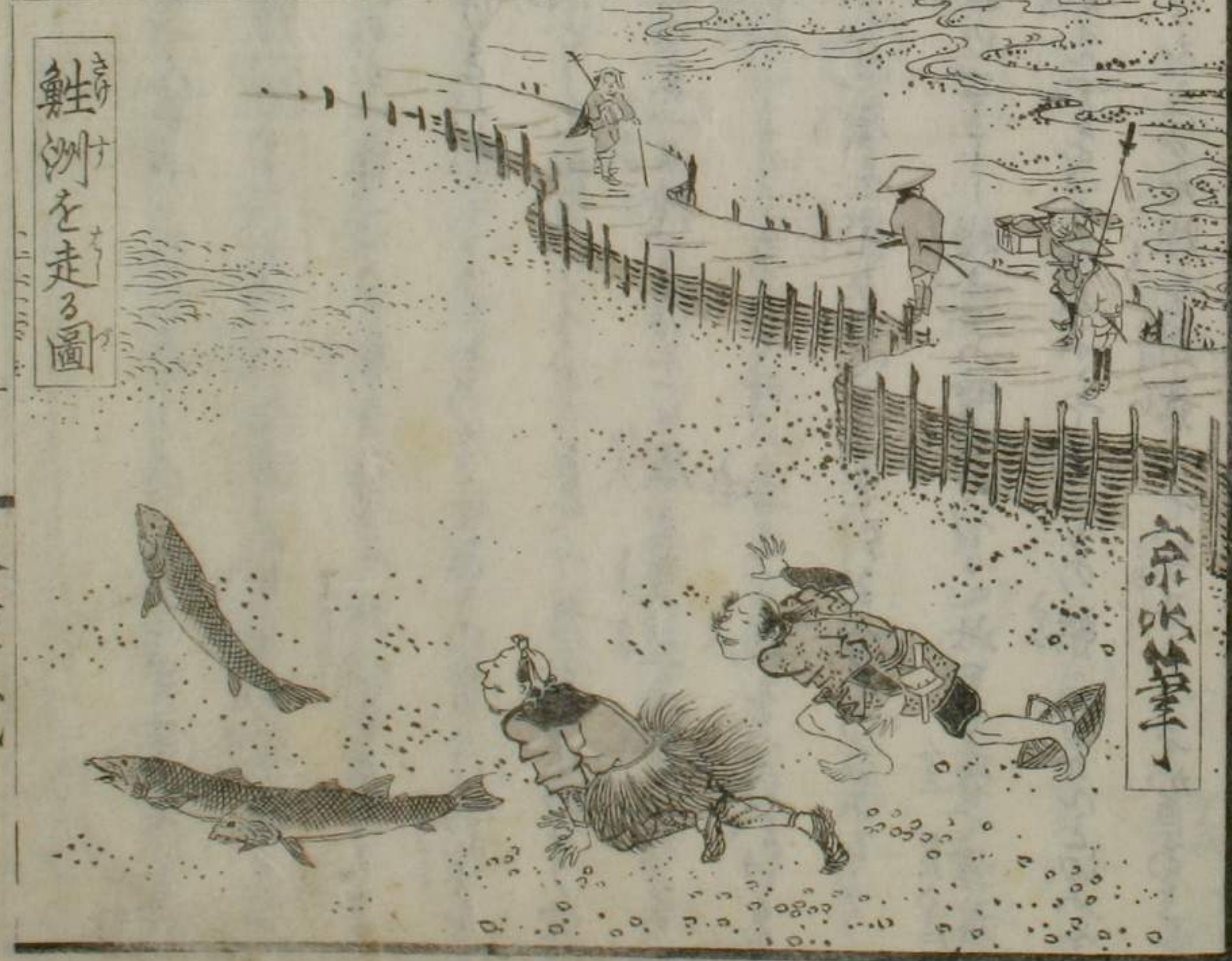
雪下る寒夜ゆも銭の為小そのさしきをもいんを赤裸ふありて水小飛入り
 つをまづ一鯉あまびつづのまゝ舟小入さしけをいんを大鯉ハ三尺ありたり
 あるものゝ鯉狂ふや魚揆といふものゆゑ頭を一打うて立地死走らふ奇な
 るゆハ此魚揆といふもの馬の尻をきりたる揆小あまびつづ死せむ私小つり
 たるつらゆめいんつ打ても外走又うまゝ頭小打ぎ取もありと漁夫がりり
 鯉ある所小くくくも此あつりをまけど助買とて鯉の仲買するもの此小屋小
 用ふと馬の尻きつちことと

○撥網

かきあまゝと撥網あり鯉を撥ひ捕るをいんその撥ひ網の作りやうハ又ある木
 の枝を曲げあつせと飯櫃あり小作りてこ小網の糸をつけ長き柄ありてま
 くらまらりとを岸の阻る所ハ鯉岸小つぎくのわりのゆゑ岸小身を置む
 りの架をまゝと小居と腰小魚揆をきり鯉を撥探りてまゝひとあり

岸の絶壁ある所ハ木の根小藤繩をくく架を釣りて小居と撥網
 をまゝも稀小あり幾尋ともるハ深淵の上小このよるをつりて身を置一條
 の繩小命をつるまゝとめとこの業をまゝ怖りとまかひらるハ此事小るま
 たらゆゑあるぞ





かり炉火を焼くをわづらうものくらせんとさぬぐふあつて待居り
 小時うらまども飯りきてさむらひびくあつてびくの所ふりうらふうのを
 さむらひたのまらもええぞ持するのまらをさむらひ下をさむらひひりもよくハ
 とらふ夫のまらをさむらひさむらひさむらひのまらよふどもこえさむらひ架をさむら
 めやさむらひもゆふうと心をさむらひ松明をさむらひ登り一跡の雪り
 あらとわづらをさむらひさむらひせん木のまらさむらひさむらひさむらひ炬のまらさむら
 ありさむらひ心つきさむらひ持するたのまらゆらう猶さむらひさむらひさむらひ架をさむら
 のつら焼残りてありさむらひをさむらひよりさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひ
 さむらひ架をさむらひさむらひ夫ハ深淵に沈むさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひ
 夜の早瀬ふらさむらひ手足凍え助り玉ふぞ免便はあつてさむらひさむらひさむらひさむらひ
 いひさけさむらひと涙を雫ふさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひ
 を投んとさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひ

養ふものあり手をひきさむらひ路上に立玉かりん死ぬるゆも死ぬる身の中成る
 くらやう一玉こつとまら雪ふひきさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひ
 哭ふらさむらひかりかてもあつてさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひ
 ふらさむらひもさむらひ雪荒ふ吹まらさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひ
 死骸さむらひええさむらひと其取ふ近き邊りの友人が此頃の事とさむらひさむらひさむらひ
 がりせり

○ 総滝

総滝と新泻の溪より四十余里の川上千隈川のなり割野村にちる所
 の流ふわり信濃の丹波島より新泻までを流る間小流の滝をさむらひさむらひ
 りりその総滝と六川をさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひ
 さむらひさむらひ水中にあらさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひ
 いりて激浪ふのなりさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひさむらひ

ちりき岩の上の雪をかりましてふ居てかの撥網をるをさきと命の惜きや
かのくしが腰小縄をつけとをを岩の尖りなる小縛かくろふ往來を
ふハ岩不足のかさるべき所をころろふ作り岩ふとりつき登り下りをるを若
一ゆを過つ時ハ身を粉小碎きて滝ふおちりゆりその危きゆりいん方
余前年江戸不在一時右の事を先の山東翁小かすりふ翁曰世路の灘
ハ総滝よりも危うん世ハ足ゆとををを渡るべきやとく笑つり格言ありと
耳ふとをまりしが今偶然おひいりてなるや多あせり

○鮭漢の類術

- 當川 三角のわいふ 水中ハ杭をうそのまをとり
- 追ひ川 水中ハ杭をうそのまをとり
- 四手細 他国ハおろ
- 金鍵 水中のまけををるがふりける
- 流し 網さしあともいふあまの長き二百けんあ
- 篠突 水中のまけををるがふりける
- このやうあまあり
- とりども 詳ふ解んハ駁難けはバその網をゆるせり

○鮭の例走り

まけのすぢり雪前ハ河原をふあふるにかきあせぬ人ゆも追
りさるごとく水を飛離せり河原ハのり網ある所ををる水ふとび入りて
あまを退る之此時ハ大鮭さふををる水ををるまよりゆる小鮭をど
后ハ随ひてのり河原ををる事四五間ハををるまも前のごうして人
の足もかよびがてさふををる大鮭ハ物ふきりて横小網を時ハあとり
あまひさる鮭もかよびさふををるまよりゆる小鮭を
して手も濡さば二三頭のまけををるまよりかき足無して地ををるを倒さ
ふとび起さるるを鮭族中比ふまよりゆるま奇魚といふ

○垂氷

前年牧之江ハ小旅宿の頃文墨の諸名家小謂して書画ををひ一時前の
山東庵ハ交情厚くするてまて訪ひし京山翁當時ハいま若年

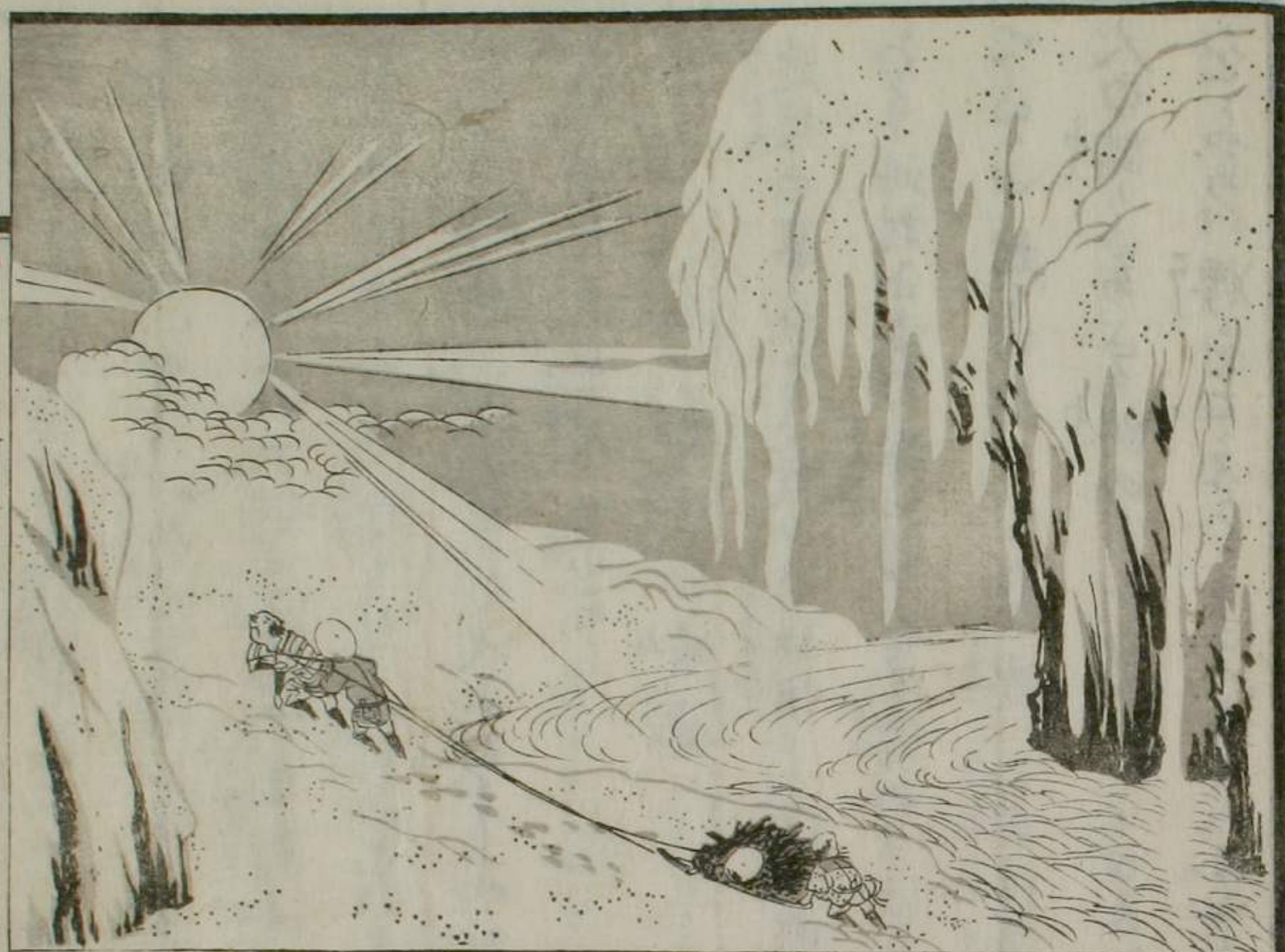
人坐して狭くぬねやどゆくや絲あるごとく我が上越後ハ名をよぶ奇岩か
りさ中ふこももとの一ツハ此爰押岩の氷柱を我が国の人も目をおどら
るるもそのつらあまも下りたるあつハ長き六丈むり太さ八寸抱
もあまも一舞する形状ハ蠟燭のるるごとくやうるもど里地のつらごとく屈
曲種くのくまをまて水晶あてエ小作りやうるごとく玲瓏とて透徹
るが曠の暉さハもの小比ぶごとくと此清水村の里正阿部翁のまのがたりふ
てきぬ右のつらま我をまめつらハめぐりうる移ハ強くそふやく人な
此清水村の阿部翁ハむり世ハ聞えたる阿部左衛門の尉が子孫之世も清水城
の関守よりとそふ長尾伊賀守の城跡あり

○滝の氷柱

我が上越後ハ山岳つらるる六滝多し滝ある所ハ夏木の大樹ありて春ふゆり
枝ふつり雪まづとけて葉をいざね木の森をまらるる滝の氷烟枝ふ
潤ひし津とあり氷柱とありて玉簾をうけ周りうるあつハこもも又
うてふまもりのやうまもこの滝もあつる氷柱とあり玉簾の内ハ滝
をおもてありる四辺ハ亂瑠細玉の雪中ハかの玉を出るとハ崑山もかくやと
おのりるかろ奇景も獵師樵夫のやうる人稀とてまを暖國の人ハまを
しつふめぐりしとろちもあつん牧之拘崎より妻有の庄ハ山越志る時目前ハ
そるる可く

○雪中の寒行者

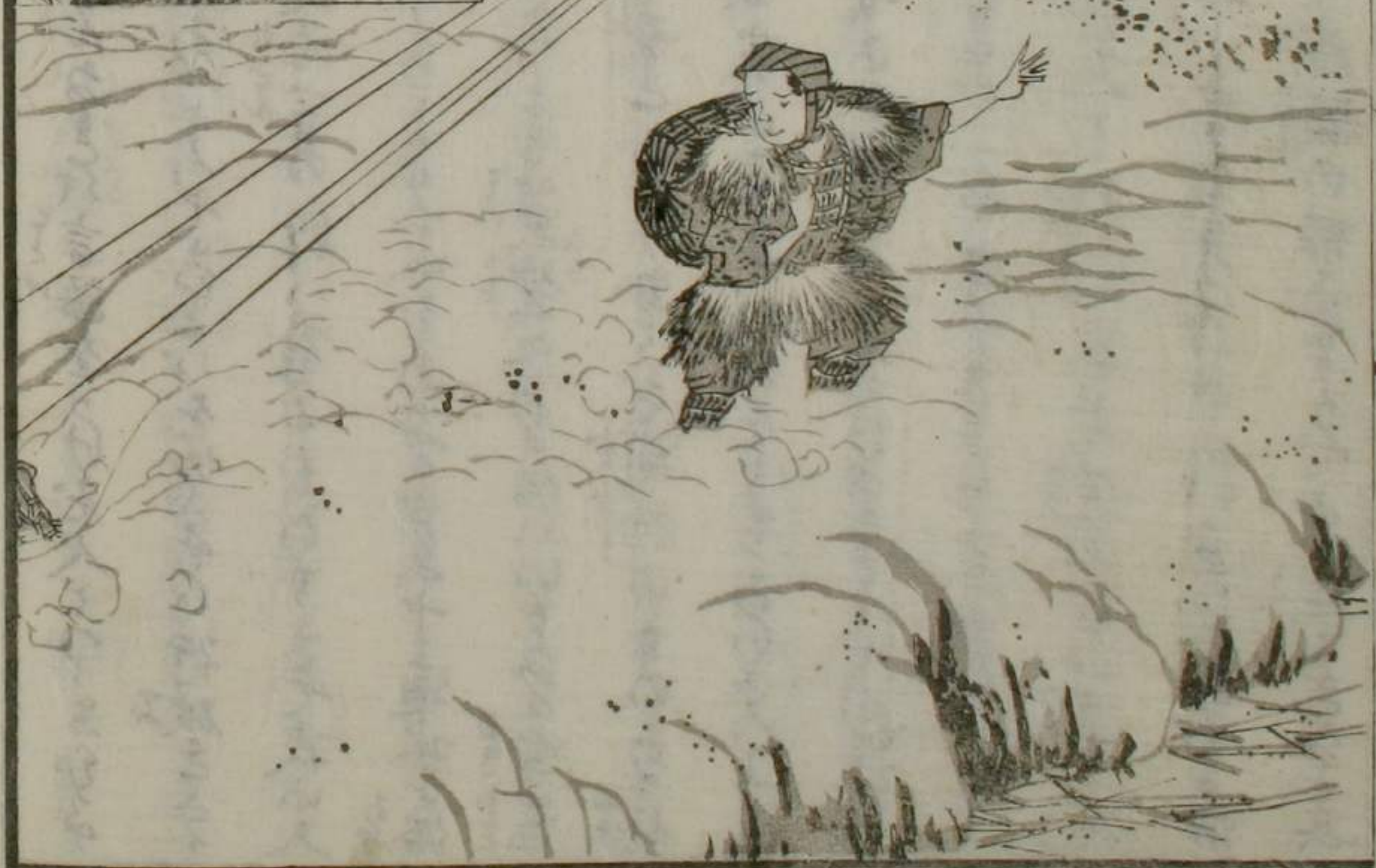
我が家ハ江戸ハ二とせ居る僕ありくまらりしハ江戸ハ寒念佛と
て寒行をまる道心者あり寒三十日を限りて毎夜鈴が森千住ふゆり刑
死の回向をまるそのまが六股引草鞋あつあつうふ着てつとむるあり又
寒中裸参りといふあり家作ふかろるまての職人の若人らもまらるるあり
そのまが六常より長く作りし挑灯ハ日参るとの文字をまらるるあり



爰掛岩大冰柱圖



寒行者威德之圖



家小いり自らいづろ小回向をこそをも行の二ツとせざるゆゑ不幸ありて
 日のうらぬりゆてハ行者のきつるをまらうものくらせんわどゆふも清くして
 待て寒念佛寒大神まりの苦行あま一件のごとくまらば他国いさ
 む江戸の寒念佛裸まあり小比ふまらばまらう異にかる苦行をのせゆふ
 やその利益の灼然事を次小あま一苦行して祈まらば其の神佛も感
 應ある事を童蒙小示す

○寒行の威徳

近來の事ありき我が住塩澤より十町あまり西南小ありて田中村といふ
 あり此村小右の寒行をまら者ありけりある日朱俵を脊負ひて五六町へ
 て中村といふゆてその道ハ三国海道まら人あも驚くまら雪道ハ
 人の踏くまら跡のまをまらまらゆまら廣き所も道ハ一條ゆて其外
 をまらば腰をこそまら雪小まら入るこそまらゆまら重荷をまら持まらハ人武

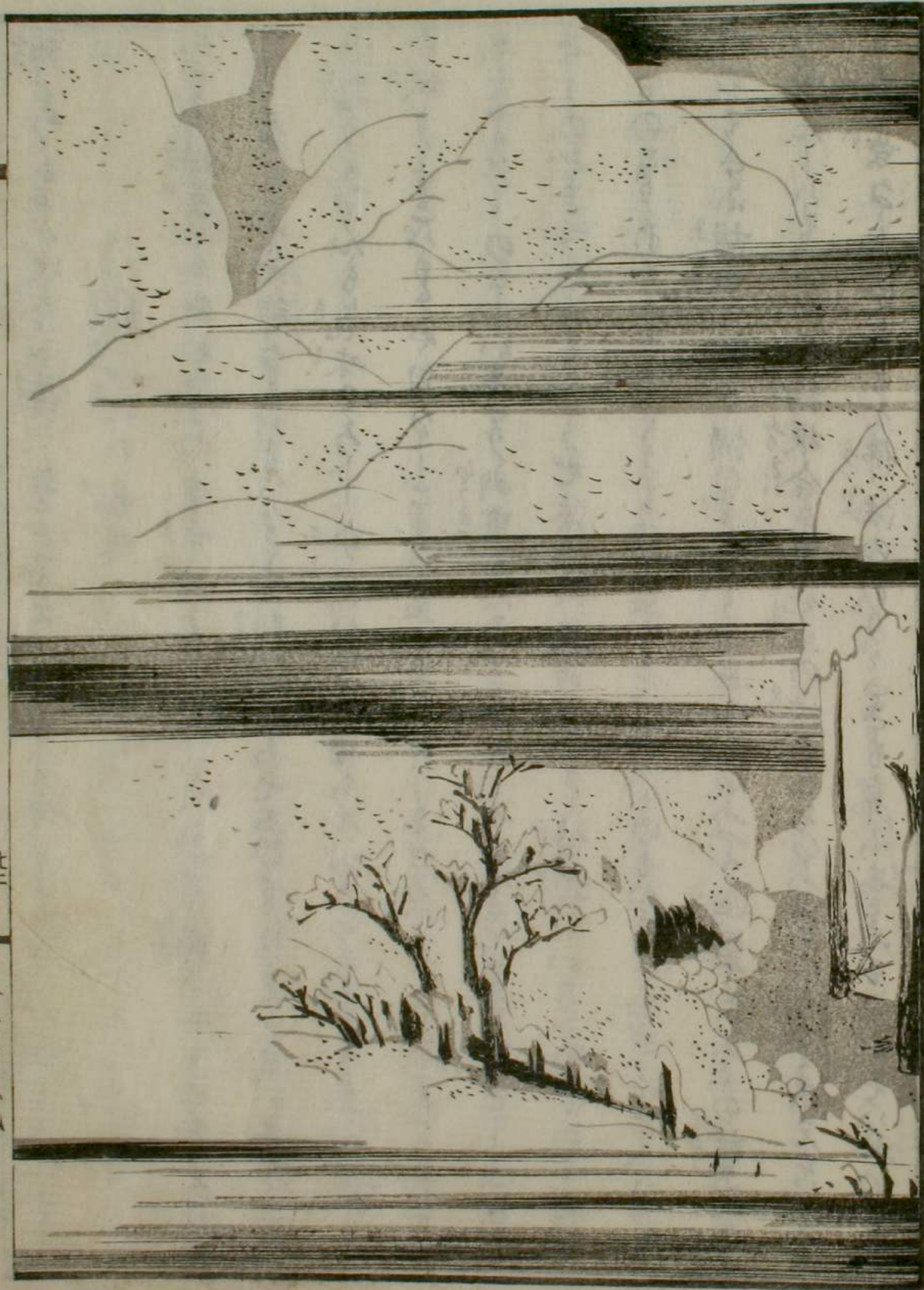
家よりとも一足踏退てあまのく道道を譲るが雪国の習ひとかの田中の者一人
 の武士小ゆまらひ重荷をまらまらゆまら一足まらゆまら小武士ハ声を
 あらげ腰よまらゆ今ひと足まらゆまら重荷ゆまらゆ雪小まらゆりんと
 おゆまらゆゆせんといふゆまら無礼ゆまらゆ肩をつまらゆまら俵を脊負て
 ゆまらゆまら雪の中ハゆまらゆ小轉び倒まらゆ小武士も又人小殺らまら如く
 倒まらゆまら田中の者ハ早く起て后もまらゆゆゆまらゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 田中の者ら小来り武士の雪中小倒まらゆ起もあまらゆまら不審立よりてまら
 ぞ病平ゆまらハバ武士まらまらまらてまらてまらてまらてまらてまらてまらて
 福と病人ともまらまらゆゆゆて手を抹り引起さんとまら小手をのまら抱えか
 こまらんとまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 めて身を動かまらハ不思議と驚怖るをまらまら武士あまらゆの事ありてハ五体
 まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

まご心えさるゝとて立飯りぬ

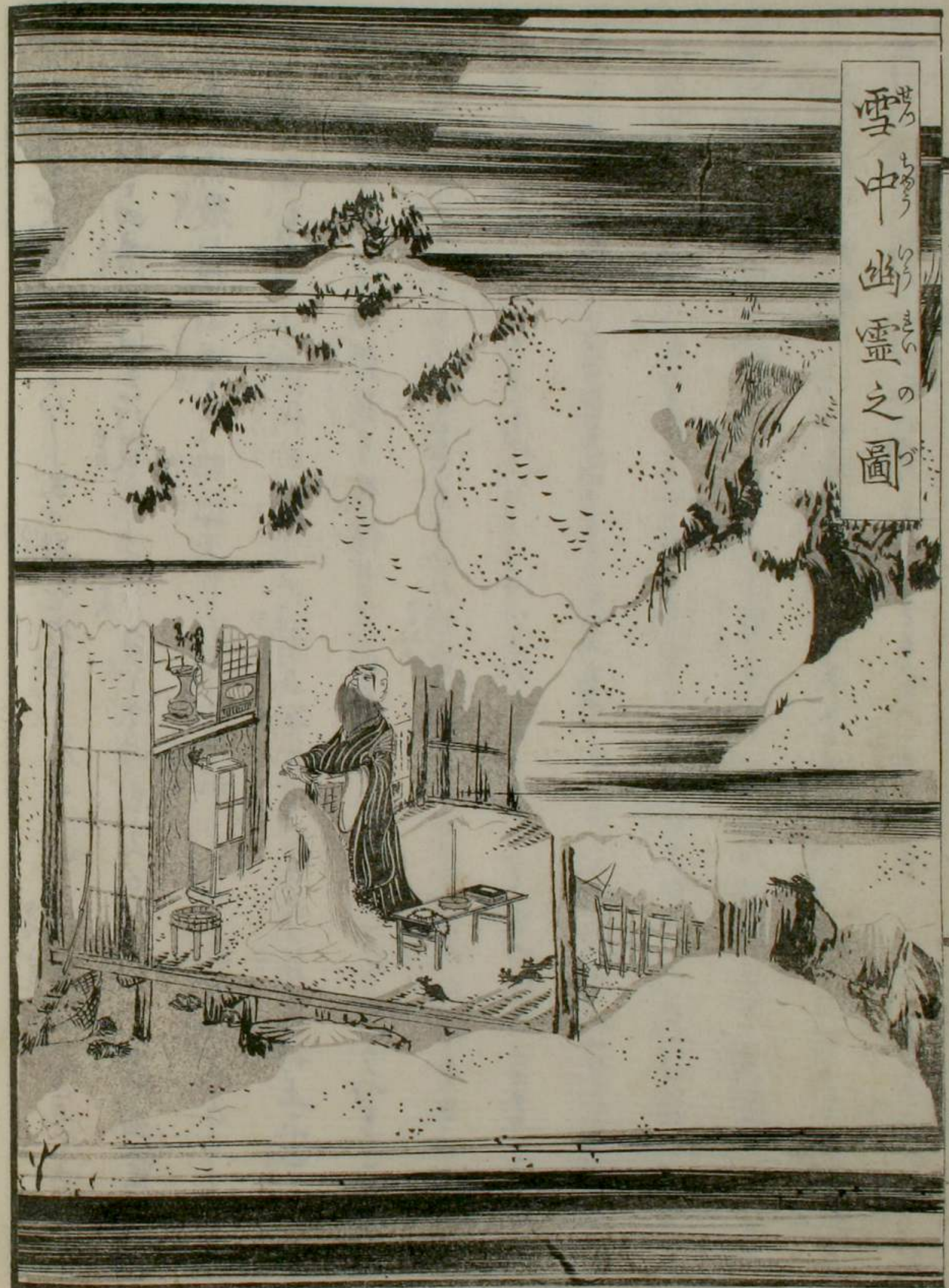
○斯くその黄昏小いなり源教ハ常より心して佛小供養しをこゝ清らり
 けし経を誦し居り七兵衛もやきてるぬ誦しをりて七兵衛小物をとせ
 きて目もくまけまば佛壇の下の戸棚小くをせ親くづき節孔もありさて
 佛のとも火も家のもまぎと幽小なり佛のまゝ小新薦をまきて幽霊を居
 らるる所より入り口の戸をもをてしわけかき研きたる剃刀二てうを用意
 し今やくと幽霊を待居り此夜ハあとも雪小なりてをてしわけかきたる
 戸よりもよりこゝ風小ありもまきえんとせるゆゑ戸をきし炉のをこふわり
 て戸棚の七兵衛小いなり蒲團ハまきまきよりてこふありて眠り玉ふみい
 ぶさることせん幽霊をえんとかいハ心小念佛するの御坊こそせをいづてふ林
 こぎ玉のらり、呼音よりあぐりふり幽霊をりるともりし音をよそ玉あ
 とのひつ、手作として人小ゆるひる烟草のあらく刻するもや吸あきし呻小会

佛を嚙ませ領ひ枕まらゝゝあが懸をぬき居り雪ハ雪簾小あゝ

音の小のこ四隣さけま寂として声るや時もろりけり○さて幽霊ハ影も
 見えど源教ハ炉小温りて睡眠をのり居眠りしつ終小倒んとて目を
 ひらきふも菊ハ幽霊何時り來りて佛小對ひまうけする新薦の上小坐り頭を
 低てぬりまをの源教も戦慄せし心をあづめてよくこそきりつとこのふ幽
 霊ハさうふこををいひまをたぐり昨夜もさうふさうだ源教手ををぎ鹽り
 水をくもり剃刀をもちて立より又まば打もてし髪つゆのさるるりぬきて
 ありまごど雪ふるるるをまてりしつあゝもさし心小あやうこまが髪の毛
 をのりしめりし後のあゝとせをやを心して剃刀をまてせらるふそりあを
 髪の毛系をつけし引ごてくろくまが懐小入る女もま髪の毛を惜むるんと毛
 を指ふかゝる剃りし小自然とてさうふ入りて手小まきまきとてし剃り
 をりりまづりまてし毛ハやうやうとらりつ幽霊ハ向く瘦る掌を合せ佛を



雪せつ中ちゆう幽ゆう靈れい之の圖づ



拜らうまが次弟小薄くあるとつんそへがきえうせなり

○関山村の毛塚

かくて袈屋七兵衛かきわする戸棚よりをひりださすも怖しきものをえはる
事よりふ法師のまばとてよくぞ剃刀をあて玉ひるさるるさかそりか
き獨りくせんも気味さうー今夜はくふ痛らん。いづれもやどり玉待一人
の飯りとまばゆもや用やーこま玉(五)右の証しふせをよとてこまむりの髪
毛をやうーのこまきさう幽霊も心ありてのこまつんてんてんをひきまば七兵衛と
まのせきて手ゆもとて法師の紙ふつとて佛壇ふまき文圃ふの玉ひ
酒ものこりあり番はくこまの玉(五)とてきつものものこりて二人のこ
炉のこまふ胡坐くま酒のこまが七兵衛がふやう幽霊のこまの語めま
つるがえいふまめて袖振合をも他生の縁とてまのこりつるふえまき
も本意なり今夜こそ佛法のありがこまも身ふまのまばゆのまはせり

ゆて百万遍をうてお菊が佛果のゆとまふせん源教をよした切徳ま

古志郡のお菊がゆとまのをふまけさうと人ふくまり玉(愚僧もまのを

証人として幽霊をうて教化のまよりふせんまふまもかふるまあり

と砂石集ふをえさうと人ふまきつるをまむらげふかむま一ツツかまり

まらせまらて夜もあけまば一ツの夜具をまらうてくまきうらまけり

○さてあけの日七兵衛源教を伴ひく家ふ飯り四隣の人をまつまお菊が

幽霊のまをうけりけま源教懐よりうの髪をとりひててえまま八人

奇異のおひをまぬまて七兵衛百万遍のまをひひふあつまり者ども

そまをよま善行まあひひのま玉(茶の子はまこよりまらうん御坊

ハ茶の用意を玉(数珠ハ庵ゆらりきまもあてらのを借るゆらうん

猶人をもままひあひせまらんとら七兵衛が妻もくまふありーが夫ふ

むらひとまのまふ餅をつまらうまもむらゆもまらうんこま俄ふそのまよ

りをまけり○かくてその夜源教が草庵小入にあつたりかゝりあひて
 念佛をけまぶるくふにざらゝき佛多しけり此事をかくと小傳(聞えく
 話柄と)しけりさうぞあるのいふや源教がしりかゝの髪を毛を瘡め
 石塔を建て供養せむか菊が出魂黄泉地のかげゆもよろこびあんとりひ出
 小かあり心の入あまゝありてそのすゝのひ終ふ石塔を建んとする時小い
 りて源教のやうかゝる夏の導師とせんハ我がまぶ所あゝるは最上山関興
 寺の上人を招請あまゝとといふ人さきかゝる事よりをけ
 てか菊が戒名をとりあか菊が溺死す橋の傍小髪を毛を埋り石塔を建事
 まぶる人を葬るが如くさうあつたりて終んごら小佛事を營むふかの緝
 屋七兵衛ハ此夏より發心して后小出家しけることとひとむりまのすけ
 関山の毛塚とて今小残せり

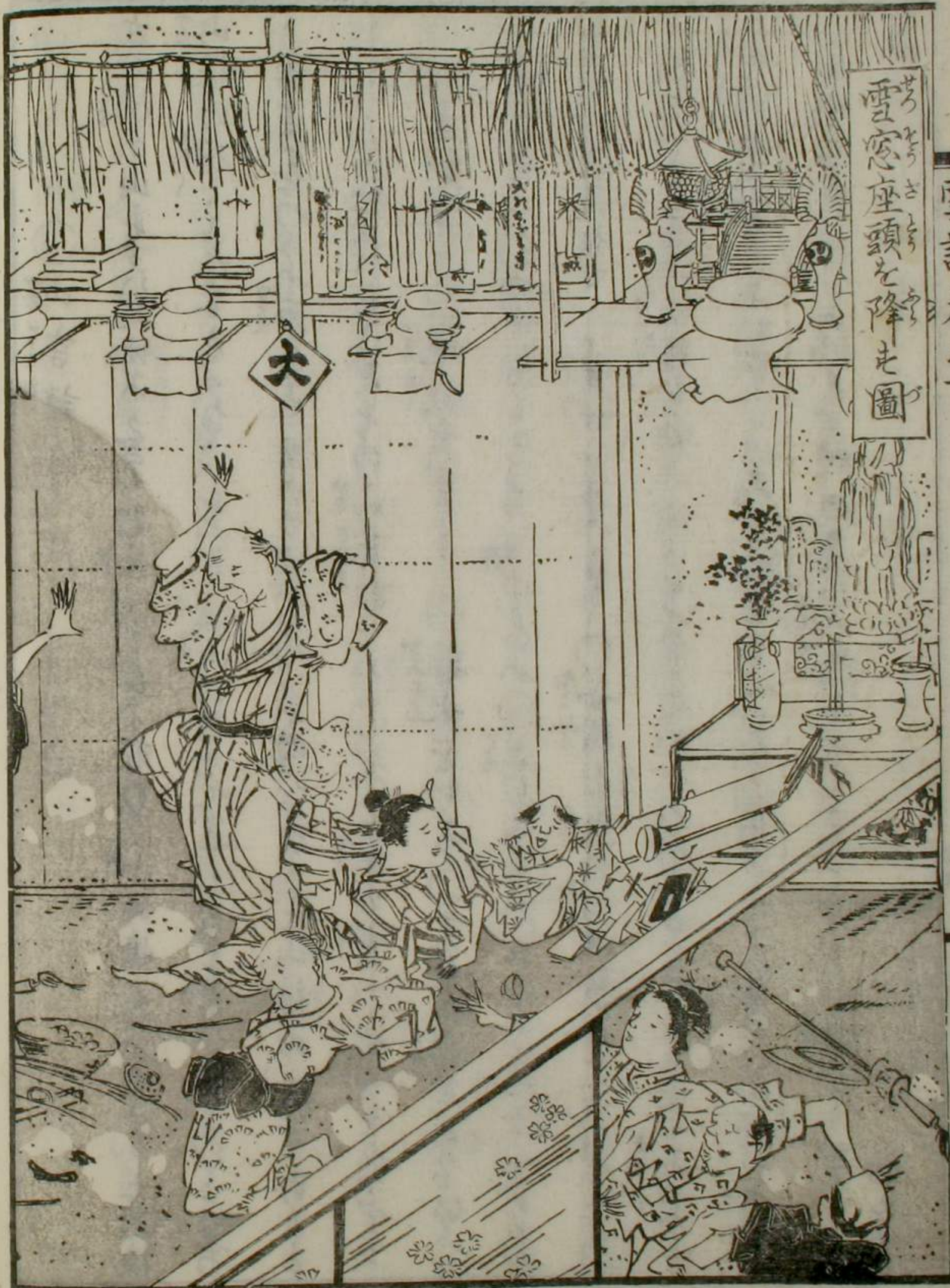
○雪中鹿を追ふ

他国の人越後ハ冬と大雪の国とありあゝるをまふもりる如く海
 濱小近き所ハ雪浅く雪とさハ奥沼頭城古志の三郡或ハ新田三嶋の三郡
 上りて深蒲原ハ大郡也雪薄き所も東南ハ奥羽小隣りて高嶺つら
 るゆ多地勢ふよりてハ雪深き所あり雪深き所ハ雪中牛馬を駆せりんと
 まぶ人ハ雪小便利のまきものを用品とせむ牛馬ゆへとまをやくと事あり
 りぞのハ雪中小まきを追バ首のありまも雪ふらまらんまぶつら事あり
 ざるかおとを十月より歳を越えく四月のそらまもハむありか
 のまこと暖国ゆへハ難儀のハとて歎ハまもりるごとく初雪をえて
 山つらハ雪浅き国ハ冬もあつたり行后まも雪小ゆへハまぶことを得る
 事あり熊のるハ上巻あり野猪ハ猛きゆ多雪やうとも得やまらむ鹿鈴羊あどハ
 弱きものゆ多雪ハ得やと鹿ハてさう高腔あるゆ多雪小ゆるり人より
 小と小似たり鹿ハ深山をこのまをわやうハ端山小居るものまぶ物小慣

木を伐りて居りて一ふ山々小響くやどの大声く猫の鳴くも人々も其声
 おのきまゝ小屋ふありたり手あけ一斧をうき人耳をききてまげばその声
 ちうくふありときげば又遠く小鳴とやるときげばちうくあまの猫ととも
 一其声ハ正しく一ッの猫とまきどまきさうふをせまきまきてのち七人の
 ものかをくちうくまきろる形ふりて又る小凍る雪ふ踏入るとる猫の足跡
 あり大きつ絲の丸盒やどありとくうた天地の造物かものなりともいふ
 づゝを我が友信州の人のかうく一何ト所の人千曲川一夏の夜釣ふ行ふ人の
 三人もをまきやどのをりよき岩水より半びてありよき釣場ありとてまきふ
 のやりてつりをまきくぬて一ふまじりありてその山岩小手鞠やどふ光るもの
 ニッ双びくいでまきりていふふとまふうちふ月の雲間をいふふよくまき
 出あひあゝで大なる蝦蟇みぞありけるひりり一もの八月のけり世人もまき
 地もまき何もうちまきて逃げまきりてとてまきぬ

○山言語

右の泊り山まゝ此地ふまきくぞ外あもまき所あり小出嶋とのああり上越後
 山根の在くまきもまきりまきく深山ふありて事をまきあひ山まきくまき
 りてまきをまきく忘まきく里のまきまきまきつる時ハまきく山神の崇りありと
 りひつて他国ハまきくまきその山言語といひ○米を草の實○味噌をほまきり
 ○塩をまきり ○焼飯をまきり ○雑水をまきり ○天氣の好をまきり
 ○風をまきり ○雨も雪もまきり ○舞をまきり ○葉をまきり ○笠をまきり ○人の死を
 まきり ○又ハまきり ○男根をまきり ○女陰を熊の穴まきり ○女陰を熊の穴まきり
 まきり ○又ハまきり ○女陰を熊の穴まきり ○女陰を熊の穴まきり ○女陰を熊の穴まきり
 竹付調とのまきり ○女陰を熊の穴まきり ○女陰を熊の穴まきり ○女陰を熊の穴まきり
 信がまきり ○神のまきり ○人慮をまきり ○詠をまきり ○物をまきり



雲窓座頭を降毛圖

○童の雪遊び

我があまのいぢをくくしるごとくおと十月より翌年の三月まで六歳
 を越へ半年ハ雪ニ此のう小生也此のう小成長するゆゑと云ふの雪遊びを
 事さぬぐあひて暖国ゆゑの事多しその中ハ暖国の人ハおもひもよう
 ざるおもひありまづ雪を高く掘揚かき上るごとを童ども打よりて手あそ
 びの木鋤ゆき平らふりてそとけ
雪の中ハおもひもようを
 かくし雪国のつゆあり
 さて雪をあつめて
 土塀を作るやうふよふよとの田をつくりやうそその間ひも雪ゆて壁めく所をほ
 くりこふ入り口をひらき隣の家とてそとの田の中も入り口をひらく此内ハ
 宮めく所を作りまふ階をまうけ宮の内ハ神の御体とも思ふやうふほ
 くりまゝこまを天神さぬと称し
多むを大く
 多むもつる
 遊ぶと云ふ物も
 をも作るまづこまの雪ゆき作りとつるこ
雪をふかめつるをまはさく
 火をくふまはさるる
 こまを雪堂
 又城ともいふ思曹右の雪堂の内ハあつまり物など煮く神ゆもさげこま

よりてうちく又間ふへてそを作りとるハとりの家ハ准(さぬぐ)の事をか
 してとらむ遊ぶあそび儂バ斯作りとるを打こつをもあそびとて又他の
 童のこまふちくくおとどさぬふ作りとるを城をかともあどいひてうちくふ
 もありそのまふあそびもありかの是牧之も童のころはうるあそびの大將をも
 せしむりく大馬の齡を歴く今ハ夢のやうとなり

○雪ハ坐頭を降そ

まふあまのいぢとく雪のうちハ春をむつるゆゑ歳越の目もふらつとこの家
 あそもこまふ雪を掘く窓のあつりをとりやりとる雪も年越の事あけ
 まふあまのいぢとて取除をくく掘揚の屋上ふひとらき雪道歩行ふとりのあ
 き所もありひらせ歳越の夜余が点をあする俳諧の巻を懐ふ俳友兔
 角子を伴ひその巻の催主のゆとらしてて巻を主ハ遣しけはふよろこび
 て今夜ハめぐり夜ありゆらく語り玉とく主人の妻も打まがり

文溪堂近刻書目

北越雪譜後編 三卷

越後 鈴木牧之編撰 京水百鶴画圖

右前編よりして雪中神社の祭事佛閣の法會民間の行事
大小雪車の制作用状雪中種々の奇談珍説を記し雪の消終る
まをを圖ふものなり北越の雪中を目前に視る如き書也

骨董集二編

上帙二卷 下帙二卷

醒齋京傳先生遺稿 京山人百樹翁補訂

右舊板曾て本舖に購し得るもの多し京山翁より乞ふる醒齋先生
の遺稿を索め翁正し補訂を下し之を紙上梓せ

女粧考

五卷

京山人百樹編

上古より近古までの女の風俗の古圖をのせ古書を引く其風俗の
沿革を考へ鏡櫛を考へるものあり女の容飾の道具るるべし髮脂
白粉の始原眉を拂ふ夏鍍漿をつける事のもの其譯説など
まづ女の風俗に係りたる事をのせしを記せり

和漢印章考

五卷 同編

本朝古印の模本を圖し其制度の用格を弁む其考(漢印の
考)より紙以て和漢と目をすまづ朱象賢の印典の作格に倣ひて記り

食物沿革考

同編

昔の食物と今の食物と寔格在る事を弁し食器の古圖を
のせ考を記せり

芭蕉翁年譜

一名を芭蕉年代記 翁一代の始終を記せり

同編

高尾尾考

妓女高尾十一代の傳を記し 遺墨遺墨を考へるものなり

同編

茶湯初心抄

茶道を学ばざる人此書をまよひ 茶席ふつとありても耻をとらざる

同編

俳諧早引草

著作堂主人著

四季の詞ハさうりまづ俳諧不用也意きのものハもさう
註釋し見るふ見やましく引ふ速るを宗と以席上の重宝
あまふまのの形

東都著作堂主人著
玄同放言 第一集三冊
第二集三冊
第三集三冊

出來

天地之部植物之部人事之部亦人事之下より
器用之部に至るこの篇ハをさく珍説奇談を雜
識一且縮字を多く載せしめ閱するのふあふさ
志むあまを上集ふ比ふ俗の耳ちらゆるも多かり

同 第三集 三冊

器用之部より動物之部に至る古器異獸奇鳥等
の圖説多く此集中ふ有異聞珍説多し閱するの
ゆえ佳境ふ入らん就中佛法僧鳥の寫生ハ古人の
摹本を多くあつて異同あを著る此他北越の雪
む異魚海獸の画面をく寫生を旨とせ世に罕
る物種々載り

同 第四集 三冊

此集全部十二卷ふ至りて始めて全くと遠く
全書とらんまのり

天保七^{丙申}年九月發兌

大坂心齋橋筋博勞町

河内屋茂兵衛



書肆

江戸小傳馬町三丁目東側

丁子屋平兵衛壽梓

